

ができた。

3. 韓国中央気象台訪問

会議中に暇を見つけて、韓国中央気象台 (Central Meteorological Office; 1985年9月からは Korean Meteorological Service という名称に変更された) を訪問した。中央気象台は会場から車で5分程の高台にあり、構内には気象研究所もある。無線施設があることから、構内は軍事施設に指定されており、カメラの持込は禁止されており、パンフレット類も発行されていなかった。気象台の玄関ホールには、李朝時代に組織的に行われた雨量観測に用いられた青銅製の雨量計と石でできた測雨台が展示されていた (韓国では、ハングル文字を制定したことで有名な世宗の1441年以来、今世紀初頭まで組織的な雨量観測が続けられ、150年間程の記録も残っている)。中央気象台は科学技術省に所属しており、職員数は全部で700名程だそうである。予報の現場には日本の気象庁からの種々の情報がファックスで入ってきており、他にも中国やソ連 (ハバロフスク) からのファックスも入電していた。また数値予報も始めたいということで、気象庁数値予報課の北出氏が WMO の専門家として気象研究所に滞在され、数値予報の基礎教育を実施されていた。中央気象台には現在、電子計算機としては小型の PDP しかなく、大きな計算は TSS 端末から科学技術省の大型機にアクセスするという方法が採られている。また気象衛星関係では MDUS が設置されており、「ひまわり」からの画像はテレビの天気予報にも利用されていた。

中央気象台と同じ構内にある気象研究所は1978年に国連の援助で設置されたということである。研究所は3階建の瀟洒な建物で、職員数は約50名 (研究職員は約40

名) で、総観気象と応用気象の2つの研究部がある。現在は主に業務的な内容の研究が多いが、現在組織を変更中ということであった。所長の Park 氏は以前日本の気象研究所に滞在されていたことがあり、筆者らとも旧知の間柄であったので、今回の訪問にあたっては色々と便宜をはかって頂いた。また、Park 氏は最近まで中央気象台の予報局長をされていたので、1984年のソウルの洪水の際の予報の苦労話なども聞かせて頂いた。

4. おわりに

筆者らにとって初めての韓国訪問であったが、会議期間中は好天に恵まれ、また国際会議を成功させようという韓国側の熱意が感じられて、楽しく過ごすことができた。

韓国は現在国をあげてソウルオリンピックを目指しており、市内は地下鉄やビルの建設ラッシュで交通渋滞も発生し、排気ガスによる大気汚染も相当ひどい。ちょうど東京オリンピック前の日本という感じである。

ソウル市内の観光名所もいくつか訪れたが、市の南部にある南山 (265 m) からは全市が展望できるが、写真撮影は禁止されており、展望台へ昇る時にカメラは預けなければならない。やはり臨戦体制下の国であると認識させられる。しかし、会議期間中に、会場のすぐ傍にあるアメリカ文化センターが占拠され、日本でも大きく報道されたが、現地は案外に静かでわれわれ旅行者でも現場に近づくことができた。日本国内でマスコミを通じて見る韓国と、実際の韓国との間にはズレがあるようで、近くて遠い国「韓国」をもっとよく知る必要があると感じられた。機会があれば再訪して、その素顔をもっと知りたいと思っている。

国際学術研究集会への出席補助金受領候補者の募集

国際学術交流事業 (天気32巻5号参照) の一環として、国際学術研究集会への出席の旅費もしくは滞在費の補助を下記により行いますので、希望者は期日までに応募願います。

記

1. 対象の集会：昭和62年6月末日までに、外国で開かれる国際学術研究集会。
2. 応募資格：日本気象学会会員で、国際学術研究集会に出席し、論文の発表、もしくは議事の進行に携わる予定のもの。

3. 募集人員：若干名
4. 補助金額：総額20万円
5. 応募手続：所定の申請書類 (日本気象学会事務局備付) を、昭和61年6月30日までに国際学術交流委員会 (東京都千代田区大手町 1-3-4 気象庁内 日本気象学会気付) に提出する。大学院生は、指導教官の推せん状も併せて提出する。
6. 補助金受領者の選考・義務：国際学術交流基金運用の方針に基づいて行う。